**２０２０年度　入門講座**　　　　　　　 2020年11月15日

**第二十一課　イエスの復活**

* あなたはイエスの復活ということを聞くとどんなことを思い浮かべますか？

**Ⅰイエスの復活の意味**

「安息日が終わると、マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメは、イエスに油を塗りに行くために香料を買った。そして、週の初めの日の朝ごく早く、日が出るとすぐ墓に行った。彼女たちは、「だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか」と話し合っていた。ところが、目を上げて見ると、石は既にわきへ転がしてあった。石は非常に大きかったのである。墓の中に入ると、白い長い衣を着た若者が右手に座っているのが見えたので、婦人たちはひどく驚いた。若者は言った。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。ごらんなさい。お納めした場所である。さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言っておられたとおり、そこでお目にかかれる』と」。（マルコ16・1～7）

１．神がイエスを復活させたその意味は何でしょうか？

「**イエスは生きている」**

イエスの一生は完全な愛の道であり、その頂点は十字架の死であった。しかし、イエスの道の最終到着点は無ではなく、復活による勝利であった。復活の中心的な出来事、それは、イエスが時空を超え、血肉を超えた存在であるということである。神は、イエスを処刑した支配権力を拒絶し、支配権力が殺したイエスを受容されたのである。

* マルコは空の墓の意味を強調している。

イエスは死人の間にはおられず、生きる者と共にいる。イエスは歴史的人物であるというだけでなく、今日の私たちに関わる存在である。

復活は信仰の対象である。復活を受け入れることは、その人の生き方が変わること。死によってすべてが終わってしまうと思うか、死は最終的なことではないと思うかによって、その人の生き方が変わってくる。生と死を超えた新しい生命に満ちたイエスと個人的にどの様に関わっていくかがわたしたちに問われていることである。

私たちはイエスの復活なくして、イエスを知り得なかった。イエスの生涯が十字架刑で終わっていたなら、紀元１世紀に十字架刑に処せられたユダヤ人の一人として、イエスの記憶は過去に埋もれてしまっただろう。イエスがいかに偉大な人物であっても、イエスの死が単なる死であり、その死ですべてが終わっていたら、今日までの２０００年、キリスト教は続いていない。イエス・キリストを信じるか否かの決め手になるのは、イエスの復活を信じるかどうかにかかっている。

このことを心から信じることができるよう信仰の恵みを祈りましょう。

パウロ「キリストが復活しなかったなら、私たちの宣教は無駄である」（Ⅰコリ15・14）

２．信じなかった弟子たち

この世で何が信じられないといって、イエスの復活ほど信じがたい事件はない。聖書を読むと、使徒たちでさえ、そう簡単にイエスの復活を信じたのではないことが分かる。

1. ルカ24:1~12

「週の初めの日の明け方早く、準備しておいた香料を持って墓に行った。見ると、石が墓のわきに転がしてあり、中に入っても、主イエスの遺体が見当たらなかった。そのため途方に暮れていると、輝く衣を着た二人の人がそばに現れた。婦人たちが恐れて地に顔を伏せると、二人は言った。「なぜ生きておられる方を死者の中に探すのか。あのかたはここにはおられない。復活なさったのだ。まだガリラヤにおられたころ、お話になったことを思い出しなさい。人の子は必ず罪人の手に渡され、十字架につけられて、三日目に復活されることになっている、と言われたではないか。」そこで婦人たちはイエスの言葉を思い出した。そして、墓から帰って、十一人とほかの人皆に一部始終を知らせた。…使徒たちは、**この話がたわごとのように思われた**ので、婦人たちを信じなかった。しかし、ペトロは立ちあがって墓へ走り、身をかがめて中をのぞくと、亜麻布しかなかったので、この出来事に驚きながら家へ帰った」。

1. ヨハネ　20:24～28

「１２人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られた時、彼らと一緒

にいなかった。そこで、ほかの弟子たちが、『わたしたちは主を見た』と言うと、トマス

は言った。『あの方の手にくぎの跡を見、この指を傷跡に入れてみなければ、私は決し

て信じない。』さて八日の後弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸には

みな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるよう

に』と言われた。それから、トマスに言われた。『あなたの指をここにあてて、わたしの

手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしの脇腹に入れなさい。信じない者で

はなく、信じる者になりなさい。』トマスは答えて、『わたしの主、わたしに神よ』と言

った。イエスはトマスに言われた。『私を見たから信じたのか。見ないのに信じる人は幸

いである。』

「私を見たから信じたのか。見ないのに信じる人は幸いである。」これは、復活したイエスに会いたかったトマスへのイエスの温かさが感じられる言葉。トマスは後にインドで殉教したと伝えられ、それはトマスのその後の信仰を語っている。

キリスト教の中心はこの十字架の死と復活の事実である。キリストの受難と復活は分かちがたく結びついている。処刑の場であるエルサレムに向かう道すがら、イエスは使徒たちに受難と復活という一続きの出来事について何度も繰り返して予告して、彼らにとっての闇の通過に備えさせた。キリストの受難―復活を描いたもののうち、最も心を打つ預言書の一つは、『第二イザヤ書』（52・13-53・12）「主の僕の歌」苦しみ軽蔑されている男が屠り場に引かれていき、万人のために殺されるおとなしい羊であったのが、次に神に賛美されて凱旋する不思議な僕を描いている。

十字架上で死んだイエスは、死んだままではなく確かに復活した。それは蘇生ではない。人間の経験や知識による合理的な説明では、決定的にそこに起こった出来事を説明することはできない。キリストの復活は神秘的な出来事である。受難と死ですべてが終わったのではなかった。ここから人類の新しい歴史が始まった。

キリストの復活の瞬間を目撃した人はいない。出来事そのものには証人が全くない。それはビデオに納める出来事のように検証できない。歴史的事実の報道に用いるような言語ではない。神秘的な出来事である。それはイエスが「生き返って」死ぬ前の状態に戻るという蘇生ではない。四福音記者はこのことを苦心して描きだした。（例：「一粒の麦」というシンボルで説明）

芸術家たちはイエスの復活を想像するしかなかった。十字の旗をもって墓から出るイエスが描かれたのが１１世紀のことである。

３．弟子たちの変貌

誰も復活の場面を見た者はいない。弟子たちは皆イエスを捨てて逃げた。ペトロも三度イエスを否み、マルコも逃げた。イエスの死後は、ユダヤ人を恐れて、家の戸を全部閉めていた。弟子たちにはイエスの死の意味は分かっておらず、復活など到底信じていなかった。しかし、トマスはじめ意気地のない弟子たちの、その後の変貌を見ると、弟子たちは十字架上で死んだナザレのイエスに何らかのありようで出会ったに違いない。意気地のなかった弟子たちの１０人までが後に殉教の死を遂げているのである。その目覚ましい働きは使徒言行録に生き生きと描かれている。

1. イエスと出会った弟子たち
2. エマオへの道　　（ルカ24：13～35）

主題「信への旅路」

 「エマオの巡礼者」のタイトルで知られているこの物語に、無数のキリスト教徒がこの道中に自分の姿を見つけた。イエスは信仰者の傍らに寄り添うという真理である。

1. イエスとの出会いの二つの特徴

＊旅人が聖書を説明した時心が燃えたこと。

ここで二人は、イエスの十字架の死こそ神が「メシアはこうして苦しみを受けて栄光にはいるはず」だと定められたことだと感じた。

＊「パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった」こと。

パンが裂かれるとき、復活のイエスを体験。私たちが気づかないときでも復活の

イエスは私たちの旅路を共にして下さる。この事実は私達の人生にもある。神はいない,信じられないとか思うことがある。かたくなに目をつむっていては傍らに立っているイエスを見ることができない。

1. イエスの同伴　　（詩;｢足跡｣）

**“砂の上の足跡”**

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　作者不詳

ある晩、男が夢を見ていた。

夢の中で彼は、主と並んで浜辺を歩いているのだった。

そして空の向こうには、彼のこれまでの人生が映し出されては消えていった。

どの場面でも、砂の上には二人の足跡が残されていた。

ひとつは彼自身のもの、もう一つは主のものだった。

人生のつい先ほどの場面が目の前から消えていくと、彼は振り返り砂の上の足跡を眺めた。

すると彼の人生の道程には、一つの足跡しか残っていない場所がいくつもあるのだった。

しかもそれは、彼の人生の中でも、特につらく、悲しい時に起きているのだ。

すっかり悩んでしまった彼は、主にそのことを尋ねてみた。

「主よ、私があなたに従って生きると決めたとき、あなたはずっと私と共に歩いてくださる」とおっしゃいました。

しかし、私の人生のもっとも困難な時には、いつもひとりの足跡しか残っていないではありませんか。

私が一番あなたを必要としたときに、なぜあなたは私を見捨てられたのですか」

主は答えられた。

「わが子よ、私の大切な子供よ。私はあなた愛している。私はあなたを見捨てはしない。

あなたの試練と苦しみの時に、ひとりの足跡しか残されていないのは、とき、私があなたを背負って歩いていたのだ」

一番苦しいときに同伴してくださっているイエスに気付く。イエスは今も生きて、現にここにおられる。わたしの中で何かを為そうとしておられる。自分の中に生きてくださっているイエスを何らかの形で感じたこと、心に慰めを感じるような経験はないだろうか？

1. 弟子たちを派遣する（ルカ２４：３６～４９）

ペトロの派遣（ヨハネ21:15~19）

* イエスの復活の証人として。
* 復活体験の分かち合いのため。

復活したイエスは、弟子たちの受容力に合わせた姿で、自分が本当に生きていることを知らせた。復活したイエスの姿は、時間や空間を超えた生命の完成した状態であろう。

この出会いが彼らの信仰を形成し、その後二千年間も、ありとあらゆる人種・言語・文化の相違を超えて、人間を生まれ変わらせ、その生き方を変え、教会を創り上げてきた。

その秘密は、イエスの復活と呼ばれる体験があって初めて説明が可能となる。

**３）エマオで現れる（**ルカ２４：１３～３５）

　　イエスの復活；今も生きて共に歩んでくださっている同伴者としてのイエス。

　ちょうどこの日、二人の弟子が、エルサレムから六十スタディオン離れたエマオという村へ向かって歩きながら、この一切の出来事について話し合っていた。話し合い論じ合っていると、イエスご自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。

鈍い人間の愚かさ、日常生活で復活されたイエスに気付かない私たちの現実。

　　この場面でのやり取り；①共に歩いてくださるイエス。②主の側から尋ねてくださる。

主は実際に問いかけてくださっている。

　イエスは、「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」と言われた。二人は暗い顏をして立ち止まった。その一人のクレオパと言う人が答えた。「エルサレムに滞在していながら、この数日そこで起こったことを、あなただけはご存じなかったのですか。」イエスが「どんなことですか」と言われると、二人は言った。「ナザレのイエスのことです。この方は神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。それなのに、わたしたちの祭司長たちや議員たちは、死刑にするために引き渡して、十字架につけてしまったのです。わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださると望みをかけていました。しかも、そのことがあってから、もう今日で三日目になります。ところが、仲間の婦人たちがわたしたちを驚かせました。婦人たちは朝早く墓へ行きましたが、遺体を見つけずに戻ってきました。そして、天使たちが現れ、『イエスは生きておられる』と告げたと言うのです。仲間の者が何人か墓へ行ってみたのですが、婦人たちが言ったとおりで、あの方は見当たりませんでした。」そこで、イエスは言われた。

1. 叱ってチャレンジされる；囚われている場合のヒントになる。解放への導き

「ああ、もの分かりが鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずではないか。」そして、モーゼとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、ご自分について書かれていることを説明された。

　④説明；人生の旅路において、祈りを通して、私たちの話を聞いてチャレンジし、説明

するなど能動的に関わってくださる

　一行は目指す村に着いたが、イエスはなおも先へ行こうとされる様子だった。二人が、「一緒にお泊りください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」と言って、無理に引き止めたので、イエスは共に泊まるため家に入られた。一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。

　　パンを取り賛美して裂いて渡すというイエスの生涯そのものを語る4つの動作によって目が開かれた。

すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。二人は、「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか。」と語り合った。そして、時を移さず出発して、エルサレムに戻ってみると、十一人とその仲間が集まって、本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた。二人も、道で起こったことや、パンを裂いてくださったときに、イエスだと分かった次第を話した。

信仰の根本に復活がある。復活なくして救いはない。

　　信仰体験の分かち合い。イエスは今も生きて現にここにいる。私の中で何かをしようとしておられる。私を変えてくださる主と共に生きる素晴らしい恵み。「足跡」一番苦しいとき同伴される。

私たちの目は開いていても、味わえるところに立っていないなら恵みだと気付かない。

「心が燃えていた」体験があるだろうか？

感覚的認知、この時点で主と出会っていることが分かる。

**Ⅱ　弟子たちの派遣**（ルカ２４：３６～４９）

　　復活されたイエスは、ガリラヤからエルサレムのいたるところで出現された。その第一声が

「あなた方に平和があるように」。復活の第一の恵みは「平和」であった。

　こういうことを話していると、イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、「**あなた方に平和があるように**」と言われた。

　　　　「平和があるように」という言葉の中に赦しがすべて入っている。弟子たちの愚かさかげん

も受け入れた上での平和。復活のメッセージの基本。イエスの復活はその為だった。

彼らは**恐れ**おののき、亡霊を見ているのだと思った。

　　恐れ；物理的恐れ以上に、イエスについて行けなかった良心の呵責、自分のふがいなさを悔やみ、一番重要な時、無力だった自分たちへのイエスの叱責への恐れ。

そこでイエスは言われた。「なぜ、うろたえているのか。どうして心に疑いを起こすのか。私の手や足を見なさい。まさしくわたしだ。イエスの復活は、ヴィジョンとか幻のようなものではなく、肉体を持って復活された。

触ってよく見なさい。亡霊には肉も骨もないが、あなた方に見えるとおり、わたしにはそれがある。」こう言って、イエスは手と足をお見せになった。彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっているので、イエスは、「ここに何か食べ物があるか」と言われた。そこで、焼いた魚を一切れ差し出すと、イエスはそれをとって、彼らの前で食べられた。

　手と足を見る；そこに釘跡を見ることが一番大切。復活の体から十字架のしるしが消えているわけではない。復活とは過去を消し去ることではない。十字架と復活は一体となった神秘。両方を通して救われたことが心に刻み込まれている。傷跡が最も輝き、まぶしいまでの力が働いている。

イエスは言われた。「わたしについてモーセの律法と預言者の書と詩編に書いてある事柄は、必ずすべて実現する。これこそ、まだあなた方と一緒にいたころ、言っておいたことである。」そしてイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心の目を開いて、言われた。「次のように書いてある。『イエスは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる人々に宣べ伝えられる』と。エルサレムから始めて、あなた方はこれらのことの**証人**となる。私は、父が約束されたものをあなた方に送る。高い所からの力に覆われるまでは、都に留まっていなさい。」

証人；聖書を通してイエスについて学ぶことは、最終的にはイエスの証人になるためである。

何を証するのか？イエスはわたしにとって誰か。私たちの生き方で証していく。私たちはイエスの生涯を知ることで、イエスの恵みと平和のしるしとなるように生き方が変えられていく。

最終的に復活するのは私たちである。世界の大きな苦しみにくじけることなく、イエスを信じて歩んでいこう。絶えず励ましておられるイエスを感じながら日々歩もう。

宣教・派遣とは「手で蛇をつかみ、また、毒を飲んでも決して害を受けず、病人に手を置けば治る。」人にはできないが神にはできる。福音宣教は人間の業ではない。イエスと一緒にするイエスのミッションである。イエス抜きの宣教はない。聖霊との協働(シュネルギア)恩恵と自分の自由が一つになって働くとき、奇跡が起こる

**Ⅲ　復活の主と出会う（**ヨハネ21:15~1）

ティベリア湖畔で弟子たちにご自身を現わす。ペトロの三度の否みに関係するところ。アンナスの家でペトロがイエスを三度知らないと否認したことがここで償われている。

食事が終わると、イエスはシモン・ペトロに、「ヨハネの子シモン、この人たち以上に

私を愛しているか」と言われた。ペトロが、「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです。」と言うと、イエスは、「わたしの子羊を飼いなさい」と言われた。二度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。」ペトロが、「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです。」と言うと、イエスは、「わたしの羊の世話をしなさい」と言われた。三度目も、「わたしを愛しているか」

と言われたので、悲しくなった。そして言った。「主よ、あなたは何もかもご存知です。わたしがあなたを愛していることを、あなたはよく知っておられます。」

　アガパオー（本当に相手を大切にする愛）

フィレオ―(人間的愛・友情）

イエスは「アガパオー」で問いかけたが、イエスを否認したペトロは「アガパオー」に対して

「フィレオ―」でしか答えられなかった。そこで、イエスの方が「フィレオー」で問いかける。

罪の重荷に苦しむペトロにとって、イエスの愛と赦しを受ける大きな体験であった。3度イエスを

知らないと言ったことを想い出し、自分の弱さ、罪深さも、その罪ゆえにイエスを見捨て、見殺し

にしたことも踏まえての信仰告白である。それによって、ペトロは、イエスに従う特別な使命を手

に入れ、教会を託された。

イエスは言われた。「わたしの羊を飼いなさい。はっきり言っておく。あなたは若いときは自分で帯を締めて、行きたいところへ行っていた。しかし、年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへ連れて行かれる。」ペトロがどのような死に方で、神の栄光を現わすようになるかを示そうとして言われたのである。

若いころのペトロは自らの熱烈な主であったが、年老いてから、彼の両手は十字架上に広げられ、イエスの行く所へついて行くことになる。将来、ペトロがバチカンの丘で十字架にかけられ殉教することを暗示している。

このように話してから、ペトロに、「わたしに従いなさい」と言われた。

このような罪を犯したペトロをゆるし、愛して共にいてくださるイエスへの信仰。

復活したイエスを体験し、主の赦しをもらって新しいペトロとして殉教まで生きる。

自分をペトロの立場においてイエスと対話をしてみよう。ペトロの、決断できない弱さは人間の

現実を描いている。私たちも実生活の中で、ペトロのようにイエスを否定することがしばしばあるだろう。しかし、神の力は弱さの中で働くのである。

a「アガパオー｣の愛…神的な愛

大切、親切…身を切る。自分にとっても大事であるがそれを差し出す。

ザビエルは、神の愛を「お大切」と訳した。

b「フィレオー」の愛…自然的友愛、家族、友人